流動性概念と債権流動化（７）
－交換，取引，市場，流動性－

深　浦　厚　之

Abstract

According to Hume's discussion, the abstraction is the term given to the succession of the impression and ideas, which is the base of Hume's constant conjunction. Out it into the economics, the idea of the market is constructed form the succession of ideas of the transaction and the exchange, which can be observed. The term " liquidity " is also the term attached to the situation where we can observe several goods are traded and exchanged, and we refer the traded goods have the liquidity. Thus, " liquidity " is not the inherent attribute of the good, the secondary quality in Rocke's term, but the mode at best. We cannot distinguish between the trade, the exchange and the liquidity, rather to divide them is the distinction of reason which has no empiricism reasoning.

Keywords: liquidity, constant conjunction, trade and exchange, market

１．流動性観念の諸特性

前論文において，流動性概念はヒュームのいう意味での観念連合であること，そしてそのもとになるのは所有権の移転を伴う個々の取引において対価の支払いがなされているという観察に基づく概念であることを示した。財と財との交換が継起するとき，その継起の中に経済活動の連続性や行為の同一性・整合性を見出し，そこに交換の個別性を包括する流動性という概念を観想するのである[1]。

しかし「流動性」という観念は「ある財が流動的である」という言明とは異なる。換言すれば「流動的である何か」という実体（substance）の存在を考えるのではなく，流動性は種々の流動的な事物を代表する名辞にすぎないとする経験論がヒュームの立場である。「実体観念は･･･想像を通して連接され特定の名称を与えられた単純観念の集合にすぎない。われわれはこうした名称によってその集合を思い起こすことが可能なのである」（1･1･6）。どのような場合においても，精神作用の直接的対象として心に生じる観念が実体に優位することになるというのが，ヒュームの基本的立場であった。

ある観念を持つときそれを意識するのは現時点での主体の意識作用であるから，観念を

1　本稿において『人性論』からの参照部分については編・部・節の順に算用数字で示している。特にヒュームの文章を引用する場合は「」で区別した（たとえば（2.1.3）は第二編第一部第三節の参照あるいは引用であることを示す）。

持つ主体自体がその時点で常に観察されていなければならない。言い換えれば流動性は常に現在に集約されている。もちろん，流動性観念から新たな取引の可能性・将来の交換の予測，過去の取引の経験が想起されるかもしれない。しかし将来への期待は「･･･であろう」という確実性と不確実性に関する命題，過去の記憶は「･･･であった」という存在と非存在についての命題だから，結局，それは現時点における真偽判断に依拠するのである。

つまり，流動性に何か超経験的なものを考える必要はない。われわれの世界認識は感官のもとでのみ可能となり，言い換えれば，観察しえないものを想定することによって経験の不完全性を補完することは許されないが，それと同時に，流動性を観念化したからといって，観察することのできない交換や経済主体の行動を超越的に考慮することは意味がないのである。では実際に流動性観念は経済分析としてどのように展開できるのだろうか[2]。これが考察されるべき課題である。

この課題はいくつかの小課題に分けて考えることができよう。第一に，流動性観念と市場概念の関わりを明らかにしなければならない。実はこの点が前論文で見落とされていた論点あり，これを修正することが本論文の大きな目的の一つである。端的に言えば，流動性観念の起点となる取引は市場を構成するから，流動性は市場の構造との関連においても説明されなければならないのである。これには二つの論法が可能である。はじめのそれは市場認識がアプリオリに与えられるとするもので，よって市場の枠組みの中で流動性を考えるというものである。つまり，市場認識は流動性認識の前提，流動性を考察する際の思考の雛型となるというものである。これを逆転させたのがもう一つの論法であり，流動性観念が市場認識の前提となると考える論法である。われわれは第二の論法に従うものであるが，いずれにしても，流動性（あるいは市場）を認識する我々の能力は市場（あるいは流動性）という認識のレンズを通して思惟（notion）の対象となる[3]。

第一の問題がクリアされれば次に，個々の取引経験の基づく観念連合がいかにして複数の個人間で共有される観念になるのか，言い換えれば流動性あるいはその具象としての貨幣の社会性はどのようにして形成されるのか，を解明しなければならない。取引は双務行為であるから，少なくとも二人の人間によって流動性が観念されなければならない。また，ケインズが指摘するように，最大の流動性，万人が受け入れる流動性を考えるとすれば，経済を構成する人間がなぜそうした観念を共有できるのかを明らかにしなければならない。たとえある人間が流動性観念を持ったとしても，同時に他人が同じような流動性観念を共有しなければ交換の継起は起こらないのである。この論点は個々の経験に基づく観念連合と，社会としての観念の共有という問題に関わっており，それはいわば流動性の道徳哲学としての側面を考察することに等しくなる。

これら二つの問題が密接に関わっているこ

2　経験論の成立は実体概念や抽象概念の否定に負うところが大きい。ヒュームはこの立場を徹底した。その結果，ロックにおいて実体とされた精神・物質はいずれもが実体性が否定される。また，実体としての物質を否定し観念の原型・思念としての精神に実体を認めたバークリーも超越する。ヒュームがバークリーの業績にどの程度通暁していたのかは研究者によって見解が異なるが，因果関係よりも相関関係を重視するバークリーの方法は恒常的連接などヒュームの因果論の中核と極めて関連が深い。

3　思惟とは観念とは異なり，意識を観念に向けさせる精神の働きという意味で用いている。

とはいうまでもない。第一の問題は個々の取引が市場として組織化される過程に着目するものであり，第二の問題はその組織化の過程に個人の経験・観念連合が持つ関わりに目を向けるものである。ヒュームの体系で言えば第一の問題は『人性論』第一編「知性について」に対応し，第二の論点は同第二編「情緒について」に対応する。本稿ではまず第一の問題に関心を寄せ，第二の問題は情念に関するヒュームの議論（愛情と憎悪に関する第５実験）に言及しつつ次稿において詳しく論じることとしたい[4]。

２．実体と流動性

冒頭，流動性観念の中で時間が現在に集約される，すなわち，流動性は現時点での経験の中で認識されることを述べた。しかしこれには以下のような反論が可能である。

交換される二つの財は同時に同じ場所を占めることはできないので，必ず異なる場所（離れた空間）に位置する。流動性概念は二つの財の交換を介して関連づけているから，ある場所において観念される流動性は同時に

4　古来西洋の哲学は経験界と存在界の対立をめぐる論争であった。人間は，経験されるものを認識するという心の動きと，事物の基となる実体に思惟が向かうという２つのベクトルを持つという傾向を持つ。これをいかにして整合的に理解するかという問題であった。経験に対峙するイデア界を考え経験界はイデア界（存在界）を志向すると論じるプラトンと，イデアを経験界に引き寄せ，形相・質料の相互作用によって世界認識を考えるアリストテレスの方法論的対立といってもよい。しかし，経験界と存在界は人間の思惟が向かう2つの方向であるならば，結局それらは思惟を媒介として関連づけられなければならない。しかしこのことは，存在界の無限性と経験界の有限性という矛盾する要素を整合させなければならない。矛盾を解消する１つの方法は，存在界の経験界に対する絶対的優位性を確立することだろう。これはプラトン，新プラトン主義，スコラ学派がとる立場である。この点，スコラ哲学にとって，存在界より一段高い世界を想定するキリスト教神学は必要不可欠であった。よって，近代科学革命によりキリスト教に依存しない真理の世界の可能性が見えてくれば，いきおいその論理基盤は弱体化する。デカルトやスピノザ，ライプニッツなど近代科学の方法論を身につけた論者が，一方においては神の存在証明をその哲学の必須要件としたのは，スコラ的伝統，キリスト教的伝統と近代哲学の双方に軸足を置かざるを得なかった彼らの時代背景によるものであった。ところで存在界を論じるということは，普遍的定義を与えることに他ならない。しかし，定義は類について可能であっても，個物に関しては不可能である。「リンゴ」を定義することはできるが，「今ここにあり，自分が見ているリンゴ」を定義することはできない。とすれば，「リンゴ」と「今ここにあり見ているリンゴ」を結びつけるなにかを想定するか，両者を切り離し「リンゴ」「今ここにあり見ているリンゴ」のいずれかのみを考察するかを選択する必要がある。前の道をとったのが合理主義思想(スピノザがその典型)，後者，かつ「今ここにあるリンゴ」をとったのが経験論であった。経験論がイギリス哲学の中に地歩を得た時期，それは名誉革命によって同国が到達した近代国家の揺籃期でもあった。いうまでもなく名誉革命は王権神授説に象徴される聖俗の権威の枠組みの中で保たれていた旧秩序に対し，勃興する新興勢力（それはおもに経済活動の中から生じた）との共存のもとでの新秩序を具体化した。それは当時のヨーロッパ社会においては全く新しい価値観であり，歴史に類型を求めることができない類のものであった。このため，それはイギリス独自の規範として合理化，正当化することが求められており，こうした要請に応えた嚆矢がロック経験論であったと見る論者も多い（岩井(1998)）。バークリー，ヒューム，リードなどロックの後継者はそれぞれに相違を見せつつも，経験と観念，共感といった共通の概念をもって，市場，貨幣，流通など近代的な経済活動を支える社会インフラが近代的な社会倫理の中で確立されて行く姿を考察したのである（ただしヒュームは名誉革命が社会契約による政体の実現であるいう見解とは鋭く対立した）。そうした中で契約・所有・所有権の移転といった自由経済の根幹をなす事象についての経験論的分析を提示し，それは共感や同感の議論を通じ，最終的にはスミスにおいて明確に経済学という形に結実した。

他の場所における流動性を内包し，その結果，ある財が位置するある空間は他の財の占める他の空間を内包しなければならない。つまり，流動性概念には現在と将来の重複に加えて，離れた場所の重複が付随する。この限りにおいて，ある場所と他の場所，あるいはある時と他の時という区別は無意味となり，流動性はその存在を制約する時間と空間を超越するように見える。そのとき流動性は無限の広がりを持つ永遠の存在であり，これは流動性が実体であることにほかならない。

しかし，本稿ではこうした議論を否定する。無現かつ永遠なるものが実体であるとしても，流動的であるという観念はそれにはあたらない。その理由は次のとおりである。交換において異なる空間や時間が共有されることは否定できない。しかし，交換においては交換比率という態様が必ず付属する。交換によって財と財は結合するが，その態様は価値の比率である価格に応じて変化する。つまり交換は価格によって両者が橋渡しされるということであり，それは財と財が占める空間と時間に境界があることを意味する。そうでなければ価格による媒介が不要である。境界によって制約・規定されるなら，「それ自身の内にあり，それ自身によって考えられるもの，言い換えればその概念を形成するのに他の者の概念を必要とせず，他者によるいかなる制約も受けない」実体（スピノザの定義）とは到底いえない。

要するに交換とは二つの財とその媒介としての価格という三つの単純観念（simple idea）がある状態に置かれていることであり，一つの様相（modes）にすぎない。財と価格という「観念から形成される様相（modes）は，接合されることなく様々な事物の中に散在する性質を表す」（1･1･6）だけであり，複雑観念（complex ideas，複数の観念の集合）を基礎づけるようなものではないのである。

流動性の実体性を否定する論拠はこれだけではない。

第一に，ある財が流動的であるのは，交換が先行するからである。言い換えれば，流動性はわれわれが交換を観察するその時にのみ観念される。よってある財が流動的であるかないかをアプリオリに決めることはできない。これは実体性を否定する。

第二にそれは二つの財の関係として観念されるから，他者を必要とするものであり実体となりえない。

ただ，実体あるいは抽象観念を否定しても，このことから存在界（形而上界）を否定することはできない。われわれの世界認識が経験の中でなされるとしても，経験による世界認識が完全であることにはならない。しかしもし経験に限界があれば，それを限界づける経験以外の他者が必要であり，それは（二元論をとるとすれば）経験界に対峙する存在界ということになる。このように存在界を消極的弁証法的に認めるなら，われわれは経験を世界認識の方法論として確立できないことになる[5]。

経験に基づく流動性の理解もこうした限界に突き当たらざるを得ないのだろうか。すなわち，流動性を観念することだけによって，経済の構造や社会の構造を認識することはできないのだろうか。この問いに答えることが本稿の課題である[6]。

5　信念のこのような解釈に対して，信念もまた因果関係から形成されるとする見解もある（Nuyen (1988)）。しかしこの場合，恒常的連接を産み出す動因をヒュームの記述の中に見出すことが難しくなる。

6　ヒュームは抽象概念を否定することで，実在は可感的あるいは可触的であると強く主張する。「視覚あるいは触覚の対象と考えない限り，いかなる空間観念・延長観念も存在しない」（1･2･3）。

3　市場観念の形成過程

3－1　取引の継起と市場

初めにわれわれの観念形成の過程において，取引がどのようにして市場観念に昇華されていくのかを考えよう。われわれは前論文において，取引の継起から流動性観念を導いたのだが，ここではその過程について改めて詳しく検討しよう。

ところで，経済学は取引を私的所有権が確立されたもとで経済主体が所有する財を双務的に相互移動させること，その結果として双方が効用水準を向上させる過程と考える。こうした個人間の互恵的な関係が社会の安定や社会正義に寄するならば，その基礎となる私的所有権の重要性がロックによって強調されたのは不思議ではない[7]。個人の生活改善欲求という欲求が他者に向けられるとき，そこからホッブスは闘争状態を予想したが，ロックやヒュームは取引・交換を通じた社会構成原理として個人と個人の紐帯として把握した。さらにその社会構成原理を市場に集約させたことが経済学を産み出す契機となったことは周知の通りである。

このような諸個人の生活改善欲求を反映する財の需給が，互恵的な関係を象徴する価格・取引量に転化される一連の過程を指してわれわれは市場と呼ぶ。換言すれば，われわれは何か取引される状況（所有権の移動の継起）を指して「市場がある」と称するといこと，市場が先行して市場という何かが財の移動を引き起こすわけではない。ここに経験論の公式を当てはめる余地がある[8]。以下では取引から市場観念が形成されていく過程をさらに詳しく見てみよう。

初めに a 財と a 財の取引（$T_1^a=[a:a]$）が実現したとする。T の上付き a は財 a が起点となっていること，下付き 1 は対象となる財が一つであることを示す。また，コロン(:)の前には相手に提供する財，後ろには相手から受け取る財が示されている。ここで観察される事実（財と財のやり取り）から形成される観念を交換と呼ぶことにする[9]。このような取引から交換という観念に至る過程を，

$$(T_1^a)\Rightarrow\Lambda_1^a \qquad \cdots(*)$$

と書くことにしよう。ここで Λ_1^a は個別の取引 T_1^a から形成される交換観念を表す。「恒常的連接からは･･･対応する印象と観念間の大きな関連があること，そしていずれかの存在は他方に大きな影響を与える」(1･1･1)から，ある観念について考察することはそのもととなる印象=観察へと考察が進むのであり，それがここでいう取引に他ならない。

次に，財 a と財 a の取引が一回限りでなく

7　もちろんロックにも先達が存在する。イギリスに限ってみれば慣習法裁判所においてはマグナカルタ以来の伝統にしたがって私的所有権の萌芽が見られ，それは権利請願の起草者として知られるエドワード・コークによって一定の体系化がなされた。ただしロック以前の私的所有権思想は王権に対する民権の主張として論じられたにとどまり，経済・産業発展と結びついていたわけではない。つまりロックとヒュームの間には権利についての認識の進展が見られる。Stewart(1995）はヒューム以前の権利の認識を Old right と位置づけ，ヒュームとの区別の重要性を指摘している。

8　識別問題はまさにこの点に対応する。観察されるのは価格と取引数量の集合であり，その背後に何かがあるわけではない。観察できるのは価格と数量の散布図であって，そこに需要・供給曲線を当てはめると言うこと自体がすでにその持点で観察から観念を引き出している。

9　形成される観念にどのような名称を付けるかは問題ではない。ここで重要なのは，取引が目前で生起し観察される事実，交換は「想い起こされた取引」であることである。

複数回反復され，かつそうした反復が恒常的に起こっているとしよう。このときわれわれはΛ_1^a，Λ_1^a，Λ_1^a･･･という観念の連続を得る。いうまでもなくこれらは時間的な先後関係を持つとともにすべて同じ取引(同じ観察)から生じた同じ観念である。こうしたことが起こる時，連続する個々の観念が連接されてあらたな観念が生じるというのがヒュームの論じる観念の恒常的連接にほかならない。では交換観念が恒常的に連接するとき，そこから生じる観念連合は何だろうか。それが「市場」であるというのが本論文の主張である。

つまり(＊)は次のように修正される。

$$\underbrace{(T_1^a)\Rightarrow\Lambda_1^a,(T_1^a)\Rightarrow\Lambda_1^a,(T_1^a)\Rightarrow\Lambda_1^a,}_{\text{反復}}\cdots\Rightarrow M_1^a\cdots(1)$$

ここで，M_1^aは財aと財aの取引の反復から得られる市場観念を表している。このとき，取引(印象)から市場（観念）への「印象から観念への推論」（1.3.6）を扶助するのが，個々の印象を一連の記憶としての心にとどめる信念（brief）である（これについては3-3節および注15で論じる）。

(1)が意味するところは，$T_1^a=[a:a]$を一歩進めて財aが自財（財a）でなく他財（財b）と交換される場合を考えればよりはっきりするだろう。この交換は，$T_2^a=[a:a,b]$と書ける。財aは自分自身だけでなく財bとも取引可能となり，（1）と同様に，

$$(T_2^a)\Rightarrow\Lambda_2^a\Rightarrow M_2^a \qquad \cdots(2)$$

を得る。Λ_2^aは個別の取引T_2^aから形成される交換観念である。さらにΛ_2^a，Λ_2^a，Λ_2^a･･･という観念の連続が与えられる時，言い換えれば財aと財bの交換が反復して観察される時，そこから財aが供給され財bが対価として支払われる市場を想起するのである。市場では無数の売り手と買い手が出会うことで取引量や価格が決定されるが，それはある財についての交換が無数回繰り返されていることにほかならない[10]（記述の単純化のため以下特に断らない限り，(2)の表現によって(1)と同様反復を含むものを意味するものとする)。なお，これに関連して「二つの事物が結合すると想像される時，･･･双方と関係を持つ第三の事物が介在しているときにも(1･1･4)」それら二つの事物は結合すると想像できる[11]。

３財の取引は$T_2^a=[a:a,b,c]$と書けるが，具体的には財aと財b，財a・財cという二つの取引が行われていることになる。前と同様にΛ_3^aの反復からM_3^aを得る。これを繰り返していけば，n財経済において

$$M_1^a,\ M_2^a,\ M_3^a\ \cdots\ M_{n\text{-}1}^a,\ M_n^a \qquad \cdots(3)$$

10　財が交換されるという事実(観察)から市場観念が導かれるということを言い換えれば，財の取引が種々の調整を経て「均衡」に至るという観察があり，その観察から均衡に至る過程が市場という観念に結実するということを意味する。これは経済学における一般的な思考経路である。近年の教科書として定評のある Krugman の Economics(2006)では，均衡への過程そのものが市場であるとの立場から説明がなされている。

11　なお,ここでいう交換はいずれも同時点での交換,すなわち空間的に隔たった複数の財の間で行われる交換に限られる。したがって以下で触れられる貨幣についても価値貯蔵機能は想定されていない。これは観念連合に与える距離と時間の効果が異なるからである。「空間と時間の双方における距離は想像に大きな効果を及ぼすが，･･･空間的距離の効果は時間的距離の効果よりも劣っている。･･･時間的距離は同様の空間的距離よりも大きな思考の中断をもたらし，したがって観念，情緒を大きく弱める」(2･3･7)。しかし，時間的に隔たった事物は情緒が弱いがゆえに，それらに思惟が及ぶ時には（＝昔の事物を想像するときには）より強く情緒を掻き立てなければならない。ここから敷衍すればわれわれが貨幣の価値貯蔵機能を利用するときは（本質的に等しいが異時点間の交換を行う時は)，現時点の交換とは異なる思惟が作用していることになる。

という連続した市場観念の列が得られよう。問題はこうした市場観念から流動性観念が得られるかどうかを検討することであるが，それを論じる前に３財のケース(Λ_3^a)を例に，財 a が財 b，財 c の交換においていわゆる交換媒体（medium of exchange）になりうること，を示しておこう[12]。

３－２　交換媒体の可能性

ここで次の定理をみちびいておこう。

定理：財 a が財 b，財 c とそれぞれ交換可能であるとき，財 a が交換媒体となる。

証明：

Λ_3^aは $T_3^a=[a:a,b,c]$から観念されるが，これは二つの交換可能性，すなわち，

$$a=[a:a,b]\text{および}\ a=[a:a,c] \qquad \cdots(4)$$

を含んでいる。また，財 b と財 c が交換できるということは，

$$b=[b:b,c]\text{および}\ c=[c:c,b] \qquad \cdots(5)$$

が成り立っていなければならない。ここで(4)と(5)が同値であれば，財 a は財 b，財 c は財 a を交換換体として間接的に交換できることになる。

ところで(5)に含まれる二つの関係は同値，つまり，

$$b=[b:b,c] \Leftrightarrow c=[c:c,b] \qquad \cdots(6)$$

なぜなら，２財だからどちらを起点として考えても同じことが当てはまるからである。それゆえ，(4)が(5)のいずれかと等しいことを示せばよい。

ところで，(6)と同じ理由により，(4)の第一の関係についても，

$$a=[a:a,b] \Leftrightarrow b=[b:b,a] \qquad \cdots(7)$$

である。(6)に(3)の第二の関係 $a=[a:a,c]$ を代入すると，

$$b=(b:b,[a:a,c]) \qquad \cdots(8)$$

となる。(5)には複数の取引関係が含まれているが，それを個別に示すと，

$$b=[b:b,a]\ \text{および}\ b=[b:b,c] \qquad \cdots(9)$$

である。このうち，$b=[b:b,a]$は(4)そのものにほかならない。また，$b=[b:b,c]$は(5)の第二の関係 $c=[c:c,b]$ と同値である。つまり，(4)の関係の中にはすでに(5)の関係が含まれている（図１。実線は直接交換，点線は財 a を媒体とした間接交換を示す)。これは財 a が財 b，財 c の交換媒体になりうることを意味する。以上の事から，市場観念 M_3^a が形成されているときには財 a が交換媒体であることが同時に含意されることになる。

証明終わり

図１　３財経済での交換

４財の場合，つまり，$T_4^a=[a:a,b,c,d]$の場合も同様の手順で確認できる。つまり，

$$a=[a:a,b]\ \text{かつ}\ a=[a:a,c]\ \text{かつ}\ a=[a:a,d] \qquad \cdots(10)$$

であるときに，財 b と財 c，財 c と財 d，財 b と財 d が財 a を交換媒体として交換可能であることを示せばよい。まず，$=[a:a,b]$ かつ $a=[a:a,c]$ だから，前の議論から直ちに財 b と財 c の間接交換が可能であることがわ

12　(3)は財 a について述べているが，起点となる財は n 個あるから(3)もまた n 通りに書くことができる。

かる。また，$a=[a:a,d]$ を $d=[d:d,a]$ と書き変え，右辺に $a=[a:a,b]$ を代入すると，

$$d=[d:d,[a:a,b]] \quad \cdots(11)$$

を得る。これは財 b と財 d の財 a による間接交換を示している。同様に $a=[a:a,c]$ を代入すると，

$$d=[d:d,[a:a,c]] \quad \cdots(12)$$

となり財 c と財 d の財 a による間接交換が導かれる(図２)。n 財の場合にも同様の手順に従い，数学的帰納法を用いれば容易に証明できる。

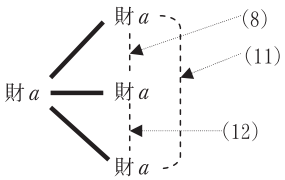

図２　４財経済での交換

ただし，以上の議論はある財（財 a ）が財 a を含む経済で交換媒体として用いられる可能性を示しているだけである。４財経済の時に財 a が交換媒体であったとしても，６財経済において同じように財 a が交換媒体であることを保障するものではない。定理１は一定数の財の相互交換においてある財（財 a ）が交換媒体となることを意味するが，財 a が普遍的な交換媒体になることを保障するものではない。高々，個々の経済（２財経済，３財経済･･･）における交換媒体がたまたま共通の財であったということだけである。つまり財 a は議論のために任意に選びうる財にすぎず，特定の財を念頭に置いているわけではない。それゆえ，一般的には２財経済で交換媒体になる財と，３財，４財経済の交換媒体が同じではない。よって，交換媒体になる財を上付き添え字で示せば(3)は M_1^a，M_2^a，M_3^a ･･･ $M_{n\text{-}1}^a$，M_n^a のように一般に表現されなければならない。ただし，本稿では議論の煩雑さを避けるため，当面は財 a を中心に考えることにする。

３－３　市場観念の相互関係

(3)の最後の項 M_n^a では，財 a はすべての財の交換に際しての交換媒体，すなわち経済学で言うところの「貨幣」(money)であり，「流動的である」ということになる。ではわれわれはこれで貨幣の誕生を論じたことになるのだろうか。

M_2^a は(2)にしたがって形成される観念だから，

$$(T_n^a)\Rightarrow\Lambda_n^a\Rightarrow M_n^a \quad \cdots(13)$$

が成り立っているはずである。つまり，すべての財が財 a と交換可能という状況が何の前触れもなく実現し，観察されなければならない。事実，M_1^a，M_2^a，M_3^a ･･･はそれぞれ別々の観念であり，それぞれが別々の観察に由来する。観念が観念を産むことはないから，(3)は(2)を単に並列に並べただけであり，M_1^a，M_2^a，M_3^a ･･･の中に何らかのアプリオリな相互関係を想定することは許されない。

しかし観念は印象を伴っている[13]。そして印象は観察される事象を伴うから，交換媒体・市場という観念をもたらす事象が相互に連続する・関連することは必ずしも否定されない。

少し歴史を振り返ってみよう。たとえば，紀元１～４世紀当時，地中海沿岸地域ではギリシャ・ローマを始原とする貨幣システム（Greco-Roman monetary system）が用いら

13　「知覚はすべて二重であり印象としても観念としても出現する。」(1･1･1)。

れていた。ローマの貨幣は当初はローマ市街近郊で用いられていたにすぎなかった。しかし，ローマ帝国の地理的拡大に伴う兵站上の必要から，後には地中海沿岸各地で用いられるようになる。むろん，それぞれの土地には土俗の交換手段があっただろう。しかし，当時の経済活動の中心であったローマとの交易上の必要性，加えて圧倒的な帝国の軍事力による強制力がローマ貨幣の浸透をもたらしている。帝国内での貨幣利用を M_2^a とすれば，周辺地域への進出によりローマ貨幣の範囲が拡大している過程が M_3^a ･･･であり，それが当時のローマ世界を覆いつくしたとき，M_n^a に到達したといえよう。むろん，それを受け入れなかった，あるいはローマが進出しなかった，もしくは撤退した地域ではローマ貨幣が用いられることはなかった。独自の通貨を持っていた極東，数世紀にわたって無貨幣時代を送ったイギリスはその好例である[14]。

13世紀から約400年にわたってヨーロッパで多用されたフローリン（florin）はもう一つの事例を提供する。フローリンは東方貿易の中継地として隆盛を極めた都市国家フィレンツェが作った貨幣である。イタリア都市国家はローマ帝国ほどの命脈を保ったわけではないが，その没落後もヨーロッパ各国はフローリンを模した貨幣を数多く発行している。中世ヨーロッパは政治的に混沌としておりローマ帝国のように経済的・軍事的影響力の強い統一国家は存在しなかった。それにもかかわらずフローリンが広く用いられたのはフィレンツェの影響力以外の何らかの要因が作用していたと考えなければならない。いずれにしろローカルな交易範囲をカバーしていたローカルな交換手段がフローリンに包括されたことは，否定しえない歴史的現実である。

14　こうした経緯については Davies(2002) に詳しい。

いずれにしてもある貨幣が用いることによって可能となる取引が契機となって，より高次の取引，ひいてはより効率的な貨幣へと発展していった。狭い経済から広い経済へ経済活動の範囲が拡大していく中で，それ以前の交換媒体を包含する，あるいは駆逐しつつ，受容される範囲が広い新たな貨幣が産み出されていったと考えるのが自然であろう。

これらの歴史的事実は，M_n^a が M_1^a，M_2^a，M_3^a･･･が独立でなく，そこには何らかの経験の継起があることを強く示唆する。したがって，我々は M_n^a は市場観念であるということを維持しつつ，それが M_1^a，M_2^a，M_3^a･･･とどのような関係を持つのかを論じなければならない。(2)を並列させて(3)を再現してみよう。

$$
\begin{array}{l}
(T_2^a)\Rightarrow\Lambda_2^a\Rightarrow M_2^a \\
(T_3^a)\Rightarrow\Lambda_3^a\Rightarrow M_3^a \\
(T_4^a)\Rightarrow\Lambda_4^a\Rightarrow M_4^a \\
\cdot \\
\cdot
\end{array}
\qquad \cdots(14)
$$

このとき M_1^a，M_2^a，M_3^a･･･相互の間にアプリオリな関係がないのは，それらが観念であることに由来する。しかし，このことは個々の観念を導く印象，つまり個々の取引（T_1^a，T_2^a･･）が独立だということを意味するわけではない。実際，T_1^a は T_1^a の一部，T_2^a は T_3^a の一部をなしているから，T_i^a だけを見れば，$T_1^a\subset T_2^a\subset T_3^a\subset\cdots\subset T_{n\text{-}1}^a\subset T_n^a$ という入れ子構造になっている。したがって，すべての財は T_n^a に含まれると共に，それ以前の T_i^a に少なくとも一回含まれている。

しかし，こうした包含関係を M_n^a について考えることはできない。よって，先述したような歴史的な経緯を踏まえつつ，取引の包含関係に含意される T_1^a，T_2^a，T_3^a･･･の連続性から M_1^a，M_2^a，M_3^a･･･の相互関係を間接的

に導かなければならない。換言すれば M_1^a, M_2^a, M_3^a・・・を間接的に継起させるような T_1^a, T_2^a, T_3^a・・・の継起が可能であるかどうかを検討することである。結論からいえばここには二つの可能性がある。

(15)は第一の可能性である。取引 T_1^a（の観察）は市場観念（M_1^a）を形成するが，その観念の助けを借りずに，財が一つ増加した次の取引 T_2^a を観察しそこから M_2^a へ移行するものである。

$$\begin{array}{ccc} (T_1^a) & \Rightarrow\Lambda_1^a\Rightarrow & M_1^a \\ \downarrow & & \\ (T_2^a) & \Rightarrow\Lambda_2^a\Rightarrow & M_2^a \\ \downarrow & & \downarrow \end{array} \qquad \cdots(15)$$

つまり財 a と財 b の交換（T_2^a）の観察，財 c を加えた新たな交換（T_3^a）の観察し，さらに財を増加させた新たな交換の観察・・・という観察の連続があり，それぞれの観察がそれぞれの市場観念 M_2^a, M_3^a・・・を導くというものである。たとえば当初はブドウとイチジクと金が交換されており金が交換媒体であったが，新たにナツメグが新たに交易されるようになり，交換媒体としての金の意味が拡大したと言った場合である。このとき，金がブドウ・イチジク・ナツメグの交換媒体であるという観念は，当初，金がブドウ・イチジクの交換媒体であるという観念から生じたわけではない。現実の交易範囲が拡大することによって新たな観念として創造されたのである[15]。このような繰り返しが M_n^a を形成する[16]。

しかし，ブドウとイチジクの交換がナツメグを含めた交換に拡大するときには，前者の交換から後者を連想すること，すなわち「イチジクトブドウが交換されるならばナツメグを可能ではないか」といった連想，が作用するかもしれない。同様に「金でイチジクトブドウが買えるなら，ナツメグも変えるのではないか」という連想が生じても不思議ではない。イチジク，ブドウ，ナツメグそれぞれの間には何の脈絡のない。しかし，金が介在することにより３つの財の間に何らかの規則性が付与されるということはありえないことではない。あたかも金という交換媒体（M_3^a）がある種のレンズとなってナツメグを視野に捉えるかのようである。たとえばわれわれは

15　この点についてヒュームは「商業について」（『市民の国について』）において簡単な二部門モデルで説明している。経済が農業部門のみからなるとしよう。ここで農業技術が進歩すると余剰生産物（貯蓄）を生まれる。この貯蓄は行き場がない（購買する財・サービスがない）ため，非生産的用途（たとえば常備軍の維持）に振り向けられる。しかし，ここで工業部門が登場すると，工業製品へ支出が振り向けられる。それは国民に洗練された消費生活をもたらし，このことがさらに技術の発達や産業活動の活性化をもたらす。ただし，農業国の国内で工業部門を誕生させることは難しい。実際には，農業部門の貯蓄が輸入に向けられ，海外から消費生活の洗練がもたらされる。「歴史を振り返れば，大半の国では対外貿易が国内工業の洗練と進歩に先んじており，当該国内の生活の洗練化の生みの親となっていることに気づく。・・・（外国製品が）新規である場合，海外製品を使用しようとの誘惑が国産の財を改善させようという誘惑を打ち負かす」。この記述は T_1^a から T_2^a への移行が海外製品の流入で生じる可能性として考えることができる。

16　ここでは単純化のため財の数が増加するときに，当初の交換媒体がそのまま用いられることを仮定している。つまり T_1^a, T_2^a・・・であり，T_1^a, T_2^a・・・というケースを想定していない。しかしすべての財が取り込まれた時にはどの財が交換媒体であるかということは問題にならない。言うまでもなく「すべての財」とはある経済圏に属する財であり，経済圏が異なれば異なる交換媒体が選択されることは言うまでもないが，このことは本稿での議論に影響を与えるものではない。

市街を歩けばさまざまな人に出会う。しかし，無意識のうちに「男」「女」「老人」「若者」といったカテゴリーに沿って印象づけるだろう。また，そうしたカテゴリーを持つがゆえに初めはただ漫然と観察するとしても，早晩，カテゴリーを通した観察に移行していく。以上のような思念の作用を考慮すれば，もう一つの類型として(16)のような構造を考えることができる。

$$
\begin{array}{l}
(T_1^a) \Rightarrow M_1^a \\
\quad\quad \downarrow \\
\quad\quad (T_2^a) \Rightarrow M_2^a \\
\quad\quad\quad\quad \downarrow \\
\quad\quad\quad\quad (T_2^a) \Rightarrow M_2^a
\end{array}
\qquad \cdots (16)
$$

つまり，T_1^a から M_1^a が観念され，M_1^a が次の観察 T_2^a へ思惟を誘導するという関係である。M_1^a

ところで，T_2^a が媒介となって M_1^a から M_2^a が導かれるという意味では M_1^a は M_2^a の“原因”になりそうであり，M_1^a から M_2^a へ向かう因果関係と考えることもできる。しかし，これに対してヒュームはこれを原因・結果の関係ではなく，「印象から観念への推移」（1･3･6）として整理した。ここにヒュームの最も重要な主張である因果関係の否定が顕れる。この推移には「一方の事物の印象を持った時に，直ちにその事物に通常付随する他の自分の観念を作り，･･･現在の印象と関連もしくは連合した観念」（1･1･6）である信念（belief）が重要な役割を演じている[17]。

信念は記憶に伴う「知覚の活性（vivacity）（1･3･5）」である。つまりある印象が強く記憶されるとくことはその印象の反復（repetition）を強く感じることである。よって，信念を伴う記憶は「想像のみで得ることができるもの以上に，（明確で）安定」（1･附録）した観念連合をもたらす。しかし，このフォーマットは幾何学の公式のように不動のものではなく，印象が継起する時間，観察者との距離に応じてかわり，また，印象を扶助するシンボルによって強化されることもありうる(1･3･13)[18]。

よって，信念とは複数の印象・観念の間の恒常的な関係を観想させるある種の「様式（manner of conception）（1･4･1）」ということができる。

観念連合の様式とは何か。われわれが電話を受け，受話器から流れ出る声を聞くとき，熟知した人からの電話であれば相手の名前や要件を想像することは可能であり，「正しく，自然に推論する」(1.4.2)。それは過去に同じ人からの電話の内容，声の調子から特定の人間についての観念が既に形成されているからである。そこには電話を受けた人が「現在の印象(＝電話)との日常的な連接を考慮しつつ，観念を確定し活気づける習慣」(1.4.2)が強く作用している。そしてある印象が「あ

17　信念については『人性論』のほか『人間知性研究』第五章においても論じられる。観念は人間の知性の産物でありある種の想像といってもよい。ヒュームはこうした想像を持ちうることに人間の精神の自由を見出していた。したがって，「人間」という観念と「馬」という観念から「上半身が人間・下半身が馬」という生き物の（連合）観念を持ちうるのである。しかし，この連合観念は虚構である。他方，「石」という観念と「落下」という観念から得られる「引力」という連合観念は虚構ではない。虚構とそうでない連合観念を区別するのが信念であり，それはある観念と他の観念が近接しているだろうと信じる心の動きである。つまり，石と落下は近接した観念であり，それらの連合観念としては引力以外に顕れ得ない（もしくは「＊＊は絶対顕れない」）と信じることである。連合観念はケンタウロスを妨げるものではないが，それが虚構であることを認識しておく必要がある。

18　これについては古賀（1994）が詳しい。

る可視的な事物に付随することが知られれば，われわれは自然に事物と性質（＝音や香り）との間の連結を，場所的な連結を含めて，想像する。それはたとえそうした連結が起こりえないようなものであってもそうである」(1･3･14)。言うまでもなく過去の反復が多ければ多いほど，信念が強く作用し，電話の音から電話の主へ思惟が向けられやすくなる。換言すれば先に形成された観念による新たに形成される観念の様式化が進む[19]。

以上のように考えると，T_1^a から M_1^a が形成され，M_1^a が T_2^a の観察・印象へ思惟を誘導するメカニズムとして(16)を考えることができる。ある経済でイチジクとブドウが金を交換媒体として交換されているとしよう。ナツメグを産する土地の商人が「ローマでは金を使ってイチジクやブドウが交換されているから，ここにあるコショウと金を交換しよう」と考え，金を持って両地域に共通する交換媒体として認識するというのが(16)のプロセスである。(14)では例えばブドウとコショウの交換，ブドウとコショウとナツメグの三者交換が行われ，それぞれが金を登場させるが，(16)では交換媒体という観念がコショウの交換を誘発するのである。

もし T_1^a，M_1^a などを集計的に扱うことが許されるならば，T_1^a から M_1^a への移行は取引量から貨幣数量，M_1^a から T_2^a への移行は貨幣数量から取引量へ向かう作用として解釈することができる。たとえば，ヒュームは紙幣が価値貯蔵手段として機能すると同時に，消費意欲を刺激する可能性に論究しているが，これは後者の作用を強調したものである[20]。また，(16)は最終的には M_n^a に到達するが，そのときには取引数量と貨幣数量は比例的である。これは貨幣数量説が恒等的に成立する長期の均衡状態に対応している。他方，そこに至る T_1^a から M_1^a，M_1^a から T_2^a･･･では貨幣数量が新たな取引量を誘発する短期的な状況を示す。ヒュームがしばしば貨幣数量説の創始者と評されるのは前者の点に着目したからである。Velk, Riggs（1985）が指摘するように，ヒュームの経済時評は極めて現実的であり貨幣や取引，信用が経済活動を短

19　われわれはここに観念が思惟に与える影響をはっきりと見ることができる。われわれは様々な事象を観察する。ただ観察すると言う限りにおいてはそこに何の脈絡も順序もない（これが(15)の意味するところであった）。しかし，われわれがよって立つ世界認識の形態，すなわちある観察（正確に言えば観察に基づく印象）が信念とともにある観念を導くというヒュームの認識理解は，実はある観念はそれ自体が思惟を導くということを含意している。むろんヒュームもこの点に留意し，これを内省の印象として観念の継起メカニズムの要素に据えた。しかし，これは観念の自立性を容認することになる。

20　ヒュームの経済分析は1752年の *Political Discourses* に収められたいくつかの論文から読み取ることができる。たとえば「いかなる国であれその国へ貨幣が従来よりもはるかに大量に流入し始めると･･･生産活動は活気を帯び」るが，いずれは物価全体が新たな貨幣量と正しく比例するようになる」(「貨幣について」)と言う指摘は貨幣数量説であると同時に(16)における M_1^a から T_2^a への移行を示している。その一方，アメリカ大陸からの大量の金銀の流入にもかかわらず，スペインやポルトガルがその後の経済発展を実現できなかったのは，それらの国々では新たな経済環境に対応する「生活様式と習慣」が確立されていなかったからと考えた。同様の指摘は18世紀の神聖ローマ帝国の停滞の原因としても挙げられている。つまりヒュームはその社会における経済的な諸条件に規定された生活習慣の変化と，貨幣数量の変化による変化を分けた考察を行っており，それぞれ(14)，(16)に対応していると言えよう。このうち，前者と貨幣数量の最終的な変化は長期的問題として，そして生産活動の変化を短期的効果としていることもヒュームの経済分析の進歩性を窺わせており，それは「今世紀の二十世紀にいたるまで実質的な挑戦を受けることはなかった」（シュンペーター『経済分析の歴史』）（坂本（1996））。

期的に刺激する側面を強く意識したものになっていることにも留意が必要だろう。

4　交換媒体から流動性へ

ある財が他の財と交換可能であるとき，その財は他の財に対して流動的であると考えるならば（前述(3)），財 *a* は流動的であるといえるだろうか。

「A が B である」という命題は，「A＝B」であるということ，すなわち A が B として存在していることを主張する（「彼は太郎である。」は彼が太郎という名の人間でありそこに存在していることを意味している）。しかし B が形容詞や副詞である「A が B 的である」という命題，たとえば「彼は女性的である」と言う場合，彼はむろん女性ではなく（A≠B），女性らしいことを意味するにすぎない。加えて，彼自身は「自分は女性的ではない」とこの命題を否定するかもしれない。つまり，この命題は観察者もしくはこの命題を述べる者の主張であり，その限りにおいて真である。言い換えれば「女性っぽい太郎」は観察者にとって存在するが，太郎自身にとっては存在するともしないともいえない。ということは命題の主張者が変われば「彼は女性的でない」という逆の命題も矛盾なく成立しうるのである。ここで挙げた命題がいずれも事実の関係であり，その真偽はアポステリオリしか決められない。逆に，彼が女性的であるかないかをアプリオリに決定することはできない[21]。

「納豆は健康的である」という命題も同様である。納豆には種々の栄養素が含まれているから，人間の健康にとって有用であるという主張としてこの命題は真かもしれない。しかし，納豆に含まれる種々の成分それ自体は単なる化学的性質を持つ物質である。それらは納豆の属性を決定するが，人間にとって健康的であることを主張するわけではないし，健康増進の目的をもって納豆に含まれているわけではない。つまり，納豆それ自体は健康的であるかないかとは無関係にそこに存在する。それが「納豆は健康的である」という命題となるには，そこに納豆を観察する観察者の視点が加味されなければならない。

つまり，「A が B 的である」という命題は，観察者や命題を述べる者による A の評価を主張するものである。換言すれば，A は B という述語により規定され，述語はそれを観察する人間の知性によるものだから，結局，A は人間の知性・知覚の範囲で存在しうるものにすぎない[22]。

命題が持つこうした特質に留意しつつ「財 *a* が流動的である」という命題を再検討すれば，流動的であることが財 *a* を規定するのであり，財 *a* が流動性を規定するのではないこ

21　これは観念間の関係と事実の関係を区別する「ヒュームのフォーク」の適用である。たとえば「三関係の内角は二直角である」と言う命題は観念間の関係であり，観念としてその真偽を確定できる。しかし事実の問題である「太陽が東から昇る」という命題は「太陽が西から昇る」と言う命題とアプリオリに矛盾しない。われわれは太陽が東から昇るという観察・経験を繰り返し持っており，その観察に基づいて形成される因果関係として理解するのであり，今後，過去の経験と異なる経験に遭遇することが否定されているわけではない。観念間の関係ではわれわれが三角形や内角という観念を変えない限り，矛盾は生じない。

22　「A が B 的である」という肯定命題においては（A を主語とし B を述語とする命題），それが真であるのは A という存在構造の中に B が構成要素として含まれるという帰属関係が前提されるというのが伝統的命題論であり，ここから述語を伴うことなく規定されるもの，つまりそれ自身として存在しうるものが「実体」という伝統的定義が導かれる。

と，流動的であるかは観察者もしくは命題の叙述者の認識によること，ことがわかる。つまり命題の叙述者は「財 a が他財と交換される」という観察を持つことによって「財 a が流動的である」と主張するのである。この意味でも流動性は実体とはなりえない。

財 a に貨幣という名称を与えたとしてもそれによって命題の構造は何ら変わらない。このことは貨幣の本質あるいは貨幣の実体を問うこと自体に意味がないことを意味する[23]。この限りにおいて「貨幣は人々が貨幣と思うものである」という自己回帰的な定義は，哲学的観点から見ても一定の妥当性を持っていると思われる[24]。ヒューム自身，事物に力能が帰属するとの議論，すなわち「事物の実体的形相，事物の偶有性や性質，質料と形相，形相と偶有性，あるいはそれ以外の何らかの性質や機能によって事物が作用する」(1･3･14）と主張する議論を否定し，力能を「事物の既知の性質に求めることは無駄である」(1.3.14）という。そうではなく，印象の継起や「反復によって新しいものが発見され，生み出されるならば，そこ(＝反復)に力能を求めなければならない。」(1.3.14)。言い換えれば，ある事物にある現象が繰り返し生起するとき，その反復それ自体に意味があるのであり，「他の事物に力能を求めてはならない。」（1･3･14）のである。

最後に M_n^a の理解において留意すべき２，３の点を指摘しておこう。(14)(16)いずれにおいても，M_n^a に至る前に M_1^a，M_2^a，M_3^a･･･$M_{n\text{-}1}^a$ が先行する。よって，M_n^a における財 a は M_1^a，M_2^a，M_3^a･･･$M_{n\text{-}1}^a$ における財 a よりも包括する財が多いという意味でより優位な位置にある。つまり，市場観念 M_n^a は下位の市場観念 M_1^a，M_2^a，M_3^a･･･$M_{n\text{-}1}^a$ に優位する。

しかし，下位の市場観念が M_n^a に対して持つ意味は(14)と(16)において決定的に異なっている。(14)においては個々の市場観念は直接継起しているわけではない。取引の範囲が拡大するにつれて新たな市場観念として生まれる[25]。一方，(16)では下位の市場観念から連続的に M_n^a に到達するからその順序が意味を持つ。ということは後者においては下位の市場観念は M_n^a にとって欠くべからざるものとして M_n^a を支配するのである。しかし両者に共通しているのは，いずれも最下位の取引観念が市場観念を限界づけていることである。この意味で最下位の取引（二財の取引）は市場経済にとって不可分な単位であるといえる[26]。ただし，最下位の取引が原因になっていると考えてはならない（言い換えれば，ここに因果関係があると考えてはならない)。

23　この点に関連して，ヒュームが金属貨幣論者であったかどうかが多くの論者によって論じられており，多くはそれを否定している。その主たる理由は本文で述べたのと同じく財の取取引，交換が貨幣に先行すること，つまり生活改善欲求を求める個人が相互に利便性を得ようとする行動が先行することに基づく。この点についての最近の議論としてはMcGee(1989)，Caffentzis(2001)を参照のこと。

24　存在とは「経験の連接であり，･･･経験が存在観念を与える」(1.3.14)。この定義はバークリーの命題「存在することは知覚されることである（Esse est percipi)」の影響下にあると思われる。実際，バークリーに従えば，われわれが貨幣を知覚するのは貨幣という観念を持つことに他ならない。よって，貨幣の存在を裏づけるのは我々が持つ観念そのものである。逆に，貨幣という実体が存在し（その実体自体を見ることはできない）その実体が現象として生じるわけではない。

25　したがって単に形式上の問題としては M_1^a，M_2^a，M_3^a･･･という順序が唯一絶対ではなく，M_1^a，M_3^a，M_2^a･･･という順序も成立しうる。

26　「面は立体を，線は面を，点は線を限界づける･･･したがって，面は深さにおいて，線は幅と深さにおいて，点はすべての次元において不可分である（admit not of any division)」(1.2.4)

たしかに，最下位の取引は始原（beginning）であり，「始原はそれに続く先後関係（priority）を含意するものの，必ずしも原因を含意しない」（1･2･3）からである。

このことは貨幣発展の歴史を考える上で重要な示唆を与える。たとえば，(14)を経て M_n^a に到達する過程はローマ帝国の拡大に付随した交易圏の拡大におよそ対応している。つまりローマ帝国の支配域の拡張により新たな財がローマ人の消費・交易の対象として取り込まれていき，取引に必要な交換媒体が形成されていく過程である。本稿では(14)においては当初から最終段階に至るまで同じ財（財 a ）が交換媒体であり続けたが，むろんそれは途中で入れ替わってもよい。とにかく交易される財の種類の拡大が交換媒体の選択を導くということが(14)の意味するところである。

他方，(16)は特定の交換媒体の浸透が取引可能な財の拡大を誘発するものであり，フローリンのケースが一例である。近年においては，たとえばドルに自国通貨をペッグするような場合がこれに相当する。これは国際的な交換媒体としてのドルの利用可能圏に自国の財を追加することであり，これはドルがある範囲内での交換媒体として先行していることが前提となる。

さらに以上の議論から，われわれは流動性の原因を交換媒体の中に求めることはできないことが明らかである。原因を見出すということはそこに因果関係を求めることであるが，上記の議論は単に取引と市場の間の恒常的連接，そこで用いられる交換媒体との恒常的連接を述べるだけである。「たとえどのような性質であっても事物の特定の性質」(1･2･2)に因果関係の原因を求めることはできないのである。

5　結　　論

「時空観念は切り離された独立の観念ではない（*no separate or distinct ideas*）。それは事物が存在する態様や順序についての観念にすぎない」（1･2･4）。時空観念を含め，いかなる抽象観念もそれ自体として存立しうるものではなく，具体的な事物に端を発する印象の継起・観念の継起に与えられた名称にすぎない。

本稿はこの図式を市場・交換・貨幣にあてはめる試みであった。市場観念は取引と交換観念の継起から生成される。動力因である個別の取引 T_1^a，T_2^a･･･が継起し反復される中で結果的に市場観念が形成されるのである。ある財が流動的であると論じることはできるが，流動性という「何か」がそれ自体としてアプリオリに存在し，それを目指して交換が行われるわけでないのである。そしてこのことから，われわれは交換と流動性を区別できない，つまり，交換と二つの財の相互移動と区別できないのであり，それを区別できるとする「理性的区分（distinction of reason）」(1･1･7)には根拠がない[27]。

そうであるからこそわれわれは「流動化」を観念できるのだろう。われわれが観察する取引はいずれも個別・独立であるにもかかわらず，われわれの理性はそこに市場経済，国民経済といった連続的な枠組みを「仮構する(feign)」(1.4.2)。流動性もそうした仮構の一つである。

たとえば，M_2^a から M_3^a に移る時（(14)(16)どちらのステップでもかまわない），す

27　「理性的区分」に関するヒューム自身の説明については必ずしも明確でないことがしばしば指摘されている（たとえば矢嶋(2006)）。ここでは一般的な理解通りロックに代表される物質に関する実在論的区別に対する批判として考えている。

なわち，T_2^a に新たな財が加わって T_3^a になるとき，追加された財と交換に既存の交換媒体を入手できるから「その財は流動化された」と表現できる。つまり，ある経済的価値が流動化されるということは交換媒体との交換可能性が確立されることであり，それは交換の範囲の拡大，交換媒体の機能の拡大と表裏一体である。したがって４財の場合，M_1^a，M_2^a，M_3^a，M_4^a すべてに含まれる第一財（財 a）はすでに自分自身が交換媒体であるから「流動化」を考えなくてもよい。また，M_4^a にしか含まれない第四財は経済が M_3^a を達成するまでは流動的ではない。同様に M_3^a，M_4^a だけに含まれる第三財は M_3^a が達成されるまでは流動的ではない。こうしてすべての財が流動的である程度に応じて序列化されるのである。

しかし，ある財がいったん流動的になれば，その財が“新参者”であるか“古参”であるかを問わず，そこに含まれる財は相互に交換可能であるという意味で差異はない。したがって，すべての財が交換媒体との交換可能性を保障される M_n^a では，すべての財は経済的な相互関係を等しく有することになる。つまり M_n^a は個々の財の物理的な差異を統一せしめる調和として理解することができる。また，M_n^a はそれ以上の流動性に転化することがなく限界を持つ。すなわちそれは永遠とはいえない。永遠でない以上それは生成されなくてはならない。事実，M_n^a は T_1，T_2･･･から生成されるのである。誰も交換しようと思わなければ，流動的な財も貨幣も存在しない。

このとき序列化の順序を表す一般名称を考えようと思うのならば，それを「流動性」と名付けてもよいだろう。しかし，それは経済に含まれる財の個々の交換に基づいている以上，序列を示す記号・名称ではあっても，不可感な実在を意味するものではない。それは個々の事実である交換の集合に与えられた名称なのである。

われわれが流動性について何かを語る時，ある資産が貨幣に近い性質を持つとき，その資産は流動性が高いといわれる。たとえばわれわれは「国債は流動性が高い」という。このとき確かに流動性という抽象名詞を使っているのだが，それは交換可能な他財を多く持つ財でもなく，少なくしか持たない財でもない特別の財の観念を形成しているということではない。ここで言及されている流動性は，様々に異なるいかなる個々の交換も等しく表すことのできる言葉であるという意味においてのみ一般的である。一般的であるということと抽象的であるということは峻別されなければならない。

これは経済学におけるモデル分析の意味を考えるときにも有益である。われわれが経済モデルを使うのは，様々な財や経済主体，国民経済の違い等を捨象して分析を進めるためである。市場モデルを考えてみよう。このモデルは，取引される財や市場参加者間の違いを考慮することが考察を煩わしくするがために，それらを捨象している。言い換えれば，そのモデルは様々な相違を含むいくつかの現象を表す代表にすぎない。われわれは眼前の経済現象を見ているのであり，目に見えない“市場そのもの”を考察するわけではない[28]。

28　これはバークリーが『人知原理論』本文第126節で強調したことであるが，『ハイラスとフイロナスの対話』第三対話においてより明瞭に述べられる。すなわち「現象を説明することは，我々が感官を通じて観念を持つその態様や順序に作用されて，どのように観念を持つようになるのかを示すこと」であり，「観念の結合を観察し，それに基づく推論によって，自然法則と秩序を発見すること」が科学の役割とされる。つまり，自然法則はわれわれが観察し可感する観念間の関係であり，現象の背後に現象の

これは平均という算術操作に似ている。たとえば平均身長について何かを語ったとしても，それはその個々の人間の個々の身長をある数値で代表させるだけである。流動性が先行して存在すると考えることは，あたかも平均身長という「何か」が個々の身長を根底において支持すると主張することに等しい。このようなことはあり得ない。にもかかわらず流動性を考えようとすれば，いきおい流動性という先行する「何か」を尺度として貨幣や財を位置づけなくてはならない。そのような「何か」は他者に依存することなく定義されなくてはならないから，結局，ある種の実体と考えるという誤謬に陥る。「存在とは，我々が存在していると認識する観念そのものである」(1･2･6)。

参　考　文　献

岩井淳，1998，革命の時代（川北稔編『イギリス史』第五章，山川出版社）

古賀勝次郎，1994，『ヒューム体系の哲学的基礎』，行人社

坂本達哉，1996，『ヒュームの文明社会　ー勤労・知識・自由ー』，創文社

矢嶋直規，2006，「ヒュームにおける抽象観念論の意義　ー「一般的視点」の認識論的基礎ー」，『イギリス哲学研究』第29号

Caffentzis, C., G., 2001, " Hume, Money, Civilization or Why Was Hume Metallist? " *Hume Studies* Vol. XXVII no. 2

Davis, G., 2002, " History of Money, *-From Ancient Times to the Present Day-* ", University of Wales Press

McGee, R., W., 1989, " The Economic Thoughts of David Hume ", *Hume Studies* Vol. XV, no. 1

Nuyen, A. T., 1988, " The Role of the Reason in Hume ' s Theory of Belief ", *Hume Studies* Vol. XIV, no. 2

Rorty, A. O., 1993, " From Passions to Sentiments: The Structure of Hume's *Treatise*, " *History of Philosophy Quarterly*, 10.

Stewart, J., B., 1995, " The Public Interest vs. Old Rights ", *Hume Studies* Vol. XXI no. 2

Velk, T., Riggs, A., R., 1985, " David Hume's Practical Economics " ,*Hume Studies* Vol. XI, no. 2

ヒュームの原著は，" *A Treatise of Human Nature* ", 2003，Dover Philosophical Classics，NY，" *An Enquiry concerning Human Understanding* " および Library of Economics and Liberty (http://econlib.org)，" *Political Discources* "，Project Gutentag Online Book Catalog(http://www.gutentag.org)を用いている。訳出においては以下の翻訳を参照した。

『人性論（一）（二）（三）（四）』（大槻春彦訳），1951，岩波書店

『人間知性研究』（斉藤繁雄・一之瀬正樹訳），2009，法政大学出版会

『市民の国について（上）（下）』（小松茂夫訳），1952，岩波書店

バークリーの原著は，" *Three Dialogues between Hylas and and Philonous* "，" *A Treatise on Concerning the Principles of Human Knowledge* "，いずれも Project Gutentag Online Book Catalog(http://www.gutentag.org)を用いた。また，以下の翻訳も併せて参照した。

『ハイラスとフイロナスの三つの対話』（戸田剛文訳），2008，岩波書店

『人知原理論』（大槻春彦訳），1958，岩波書店

原因となる力能や力能の源泉を見出そうとすることではない。